

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	部報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 154: 163-176
Issue date	1914-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6336
Right	

演説部報

討論會

後、
降、
月

日別稿の如く。長江先生の講演ありて、後會員は半日の豪懷を共にせんが爲に『我國の現時に於て内治と外政と何れかより急務なる』と云ふ題を掲げて、討論をなす。先づ松岡委員を議長に推すや、松岡君は登壇して、簡短に論題の説明を試み、且つ討論に就いての注意を興へらる。嗚呼大論戦前の大沈黙!! 兩軍相撃たんとして息をひそむるや、山雨將に到らんとして風樓に滿つるの慨無くんばあらず。

〔丙〕獨法一年階川臭一君。君は病軀を提げて登壇。實に我部に熱心なるの致す所、國力、内に充實せざれば到底應變の外交を敏活にする能はず、軍備財政整はざれば焉んぞ國威を外に展すを得んや。若し前者を怠つて、獨り後者の利をのみ得んとするが如き

ものあらば、是れ猶ほ砂上に樓閣を築くが如く、其の永續すべからざるや火を視るよりも明也。この主旨を述べ。

〔外〕文科一年前田一君。前辯士は國力の充實を計らざるべからずと、屢々云はれしが、如何にして國力の充實を計るべきか、これ根本の問題にあらずや。卑見を以てすれば、國力の充實を計る勿論其の法や多端なりと雖も、第一政治界、軍事界の墮落を一掃し、第二財源を得て國家を豊富になすの二事就中重大なり。前者は、則ち、世界に對手を求め、假定敵國を置いて、常に當路の士、否國民全體を激勵して高尚にせざるべからず。後者は則ち殖民政策に依り我國民を全世界に發展せしめざるべからず。而して、この發展の路を開く爲には、辣腕の大外交家を要す。と論じ、露國の内治必しも完全ならざるに、英雄ムラビヨフの敏腕なる、よく國權の伸長を得たりと達辯を振ふ。

〔丙〕英法二年坂内正行君。日本の現状は果して外に發展し得るの實力を有するか。之を發展せしむるに足る英雄あるか。否、國を守り國を富すは更に急な

るにわらずや。維新以來我國は内外の戦亂を續け人口増加し、負擔重くして、民力の疲弊せる眞に甚しとなす。故に民力の休養を計り、諸弊の改革をなし、世界競争の大渦中に投じて、敢て遜色なき、文明と富祐と強兵とを作るべきは、當今の最大急務也。と。

—— 外政派登壇者無きや、

内獨法一年野田海造君、登壇して開口一番、輕重本末を知らざる反對黨の諸君は、將に倒れんとする大厦高樓に益々重荷を積んで、之を起すに名大工を得んとするが如し。愚や及ぶべからず、と、警句を吐き拍手大に起る。更に話をつづけて、或は錢を愛するの武臣、奢侈を好むの紳士、大言して民衆を煽動する政治屋等いはば白蟻の爲に危ふからんとする國家を救ふは下より支ふる大木ならざるべからざる事を論ず。

外英法二年三浦圓藏君。先づ國家の大問題を論ずるに當りて、些々たる事件や區々たる引例を以て、喝采を得、以て快とするならば甚だ輕卒と云はざるべからず。方今の國治を其れ如何にすべきか、と自問して徐ろに獨逸發達の歴史を説べ、其のしばく

外政に失敗して、大刺戟を與へられし時に、ビスマルク出現し、而して今日の大帝國となりたるに見るも、吾人は邦家の現時徒らに國內の事にのみ心を奪はれず、宜しく世界の大勢より來る刺戟を以て國民を鼓舞し國權伸張を須臾も忘るべからず。と。

内獨法一年原田士驥雄君、中立派より出で、所謂外政派の論據薄弱にして、恰も教へざる民を以て戰はんとするが如きを難じ、我が國民の海外發展は先決問題として教育により、資格を作らざるべからずと論ず。

外獨法一年兼崎理藏君。内治派の議論多くは、意氣沮喪したる老人が一舉手一投足をも危むが如く、敢て勃興の氣運に乗すると云ふ氣概を缺くは痛嘆すべき也。諸君の云ふが如くんば我國は鎖國主義を再現して、實彈浦賀に至るを待つを以て寧ろ賢とせん。今は決して小日本に蟠り居るべきの時にあらず、宜しく足を海外に延ばさざるべからず。工業の材料焉くにありとするか。子供は年々殖ねる。食物は焉くにありとするか。吾人の大富國主義大強兵主義は一小團内に於て成さるゝものにあらず。諸君日本人は鬼

角丈が低い。眼を高く擧げざるべからず。

〔内〕英法二年小河正儀君、我が國の現狀は例へば全身に幾多の重傷を負ひて、銃に倚れる兵士の如し。

若しこの兵士にして再び奮戦せんと欲せば當に瘡痍を醫すべきは第一のつとめにあらずや。吾人は内治の爲に内治をするに非らず、やがて延ばんが爲にする也。前にバルカンの風雲亂るゝや、英國の外相グレーは曰く『太英國は一兵を動かさず一艦を動かさずして、大に利權を得たり』と。これ其外交の背後に無敵の軍備あるが故にあらずや。其れ軍備を擴張し、自由に海外に於て活動をなし得る爲には、今日、極力、内治を努むるを要すと、滿堂を壓するの雄辯を振ふ。

〔外〕英法二年木下郁君。反對黨辯士の所論に、一々反駁を試み、巧みなる比喻を以て自在に諧謔するや内治派の妨害しばし起る。論を進めて我國外交不振は、第一大外交家無きに因る。我國が今日の地位に居り、今日の兵力を有し、而して君國の爲には身命も財産も名譽も惜まざる國民を有しながら、何等の事も出來ざるに諸君は之を激勵する事無く、徒ら

に、辭を盡して辯護するが如くんば、我國の外政は、何時の世に於ても成功する事なからん。外交の背後に大なる實力を要すと云ふか、之れ無能なる外交家のみ。かくの如くんば恐らくは三尺の童子と雖も難しとせざらん。國家の大任を有する外交家豈かくの如きものならんやと。それより益々議論高潮し、三國干渉に於ける伊藤公外交の失敗を嘆じ、現時に於ける我國外交失敗の原因大部分は、當局の手腕足らざるに在るを云ひ、この方面に格段の努力をすべきは現時の最大急務なるを叫ぶ。

〔外〕英法一年板井實君、中立派より立ちて、内治派の所謂富國、強兵、國力充實等は漠然たる美しい文字のみ、之をなす爲には、巧なる外交に依て、海外に大富源を得ざるべからず。と説く。

〔外〕英法三年永松陽一君、日本は日本の日本にあらず、世界の日本として、存在を世界に認められ而して始めて價值あり。之が爲には、列國と對等の地位權利を確得せざるべからず、今反對黨數名の辯士は異口同音に、軍備、黄金無くしに外交を巧みにするは、一種の空論に過ぎずと説べられしが是れ空論に

非ず、歴史は之を證するにあまり多くの材料を提供する也。遠き古は語らず、千八百十二年ナポレオンが征露の壯舉に蹉跌し、愴惶バリーに歸るや露獨英佛奥の聯合軍はライプチヒに之を粉碎し、バリーの城を陥れて、多年の戦乱に結末を附けんとういんに會議を開きぬ、戦勝の榮譽を誇れる列國使臣の中に、敗殘せる佛國大使タレーランの活動は如何なりしぞ。彼はポーランド、サクソニア問題より列強を二派に分ちて彼自ら歐州外交の中心となり、戦勝の列國は敗殘國の大使の鼻息を窺ふに非らざれば、一事を成す能はず、遂に露獨二國は屈伏せざるかべらざるの己無きに至らしめたり。嗚呼此時佛國に優勝の軍備ありしか豊富の財力ありしか。又、二十世紀の初期に於てオーストリアの外相エレンタールは列國環視の中、強露を前に据ゑて、易々とポスニアヘルゼゴビナの二國を併合せしに非らずや、此時オーストリアの軍備財力亦實に云ふに足らざりし也。かくの如き者皆外交の成功にあらずや。

且つ夫れ内に在りて金錢を蓄る事、即ち内治の整理に格別の力を用ひて、積極的發展を爲し得べきか。

之を一家に例ふれば、恰も唯だ下女男の措置に苦心し、棚の掃除、床間の飾、臺所の整頓にのみ忙殺せられて、他人の田園を荒らし、屋外に勝手なる設備をせるに氣附かざるが如し。當今我國は人口の過剩を救ひ、生活難を救ひ、且つ、工業の原料を得、商業の版圖を得んが爲に、大に海外に發展せざるべからざるの秋に際せり、然れども之を爲すには必ずや有力なる外交の援助を要せずんばならず。反對黨諸君は、漫に國富を先にすべしと唱へられしが、如何にして能すべきか、雲を握むが如し。我國は古來農を以て建國の基とせしが、國庫收入の五分一を占むるに過ぎず他の五分四は、商工業に依るに見るも、將來益々此方面を發達せしむるの利なるや明也、而して、之れ實に、外交の援助に俟つもの多きを以てすれば、反對黨諸君の憂とする、富國は、實に外交を先にして始めて得べき也。と、論鋒鋭く論じ來りし一家の意見を説べらる

〔内〕英法三年古野周藏君、凡そ國家の目的は。國民生活の向上を計るに在り、換言せば如何にしてよく

米を食ふか、之を計るにありと云ふを前提として論ずる所あらんとす。夫れ方今我國の命運を定めんとするの大問題は第一、ロシアの東方政策にして第二太平洋問題、第三支那問題是也。而して是等の難題をうまく解決するに外交的大手腕と其の擁護とに俟つ甚大なるは勿論なり。而して之が爲には必ずや内治の完備を要す。然るに前辯士は軍備及財政を有せずとも、巧妙なる外交は成立す、と云ひしが、かくの如き國の外交に驚きて逃げ行く者は、猶案山子を恐るゝ雀の様なる國にして、今日の如く相立の國情を熟知せる外交界には何等の權威を有せざる也。加州問題の時、米國議員は曰く「日本を如何に侮辱するも可也。日米戦争の起るべき心配無し、何となれば日本に黄金無ければ也」と、日露戦争は殆んど全部外債に依り、その結果、民力甚しく疲弊して今日に至れり。故に我國の現状、大戦争を爲し得ざるや明なり。然るにこれにても尙外交の急務を唱へて内治を第二とする乎。

翻て内地を思ふに、内治真に急なるものあり、曰く農村問題、一日十四五時間の労働をしながら尙且つ

貧苦に泣けるに非らずや。曰く貧富の隔絶、曰く生活難、曰く人口問題、年々五十萬餘の増殖ありて之を海外に發展せしめんと欲すれども悲しい哉、充實せる國力の後援無きを奈何せん。其の他社會上、政治上、宗教上、經濟上、思想上、論するの餘地夥しくあれども煩に堪へず、例へば内治亂れて國民思想の統一無く色々の惡道徳、危險思想の發生を見るは眞に慨嘆に堪へず。故に余は外政に先つて更に内治の急なるを絶叫する者也と、例の快辯を以て謹聽せしめらる、

外英法二年津田元一君、若し夫れ國家發達の原理を説けば、先づ國力を充實し、内治を完備して然る後除に勢威を中外に伸張すべき也。然りと雖も儒生俗吏豈に時務を知らんや、何れの時代にも此の原理を以て國を治めんとするは猶ほ船に刻して劍を求むるが如し、識者は須らく眼界を濶大にて一事に囚はるゝ事なく臨機の時務を斷行せざるべからず。反對黨の諸君が徒らに國內の事にのみ没頭して、其眼界の小なるは吾人の甚だ遺憾とする所也。夫れ支那は、今後世界競争の最大舞台にして、支那自身の將來は

又、我國の將來とも云ふべく、極言すれば、我國の盛衰興亡は、支那に於ける勢力に依て定ると云ふを得ん。然かるに支那に於ける列國の勢力は如何と云ふに諸君は日々の新聞紙上にて既に御承知の事ならんも、今や英米獨佛露の諸列強は着々として鐵道布設、鑛山發掘、電信架設、水利等に於て特權を得んとし、最近英國は江蘇江西湖南諸省に跨る鐵道布設權を得たりと云ふ説あり。而して從來比較的關係少かりし米國が、猛然として勢力を張り、陝西直隸兩省の石油發掘權を得、又三都塊を租借して我が利權を侵害せんとするの報あり。又、白狼南方に猖獗にして袁政府之を制するの力乏しきや、朔北の活佛長文の檄を飛ばして内外蒙古の獨立を謀らんとすと、かくの如くんば、蒙古の背面必ず強露あるを知らざるべからず。極東の大勢此の如くなるに尙は徒らに、自ら我が國力を狐疑し、寧ろ卑下して復た何をか爲さんとする。大西郷は諸君の崇拜措かざる大英雄也。彼の達識なる明治當初既に征韓の急務なるを説きしが、廟堂の諸公、明察及ばず、夫の朝鮮の亂あり日清役あり、日露役ありて然る後、國民は漸く大西郷

の達眼に驚く然も己に遅い哉。諸君内治内治と叫んで國內の事に没頭し何時内治は完備せんか、其の完備するの日は、恐らくアルビニオンの青白旗漢南漠比巴蜀に翻り、大英國の船舶揚子江をうづめ、獨佛米の國旗各地に翻りて、外力我が四周を壓するの日ならん。『明日は雨、人は盜人』を以て唯一の處世訓となし、三國干涉にも、ポーツマス條約にも加州排日案にも、致方無しとて泣き寢入る國民は例令國力充實すとも權威を擴張する能はざるべし。見よ我が同盟國が内事多端にして一大内亂を見んとしながら其の對外政策は何等の影響を受け、東歐に、西亞に米大陸に、支那に對し、其の欲する所着々として効果を顯はし、他の列強に比して何等の遜色無きのみならず、往々之を凌駕せんとすると如何なる懸隔ぞや。古來逡巡する者多く事を誤る。今や我國は大西郷の再現を要する千歲の大機に際せり。吾人豈に内治の急務ならざるを云ふ者ならんや、外政の更に急務なるを切言する者也。

此時定刻を過くる五分、討論終結の動議出づるや、松岡議長は終結を宣し、起立を以て賛否を檢べしに、

内政派十六名、外政派十一名にてありき。兎に角近來に於ける龍南の痛快事たるを失はざりき。

文責記者に在り。乞ふ深く咎むる勿れ。

—三四。四。四。—(龍南生記)

競争演說會

大正三年二月十一日午後六時縣會議事堂で龍南會演說部の競争演說があると云ふので續々繰込んだ聴衆は五高生八分に他が二分階上階下に満ちて盛な景氣を呈して居る。

委員宮田正明君(一部二年)先づ登壇『雄辯の意義』と云ふ三十分にも亘る演說であつたが兎も傳開會の詞と云へば評は預りとして次は

古野周造君(一部三年)拍手喝采の裡に『日本民族發展の基礎』と銘を打ち御馴染の大英國の殖民主義を前據に個性の充實を以て發展の基礎とすと云ふ斷案である。未だ倦怠せざる聴衆の好奇心に投ずべく餘りに深き印象を興へなかつた只女子の個性を壓迫せるは今日の惡結果の源因なりとは新しさうで平凡結局女子の肩持かと聞いて不賛成の人が多かつた様

子。

『航空の將來』の辯士は二部三年の淺倉銀四郎君問題も辯士も人氣者丈に聴衆の方から先づ乘氣になつたのは淺倉君の大に幸とする處であつたらう。世界の大勢から始まつて航空の沿革現状効果等を昂然の意氣と雄大の言辭とを以て紹介し翻て我航空界を顧み悲憤慷慨の裡に國民の覺醒を促して論を結んだ。材料は好し抑揚も結構第一熱誠が溢るゝばかりだつたから不尠聴者を動かして早くも優勝者の候補に登録せられた。申分と云へば身振に就いて多少の注文があらう。

鬼渡君の『生命を論ず』は必ず三部(二年)式の題である充分科學的哲學的の大議論で向上發展の生命を青年に望むと云ふのが結論であつた。惜い哉論法が聊か難しかつた爲めでもあらう聞いた丈では如何にも要點の捕捉に骨が折れるそれで折角練習した流暢さも精選した美文的文句も可惜平靜無意氣を感せしむる方が多かつたのは返すくも氣の毒であつた。次に華麗な所が無い代り厭くまで侃々として力ありしはその風采にも似て東喜代松君(一部三年)の『自

滅か發展か』が一頭地を抜いで居た要するに最も簡潔で徹底した論で生産と人口との關係上國內に塾居して居ては到底自滅の外なき事之が唯一の救濟方法は海外發展にある事が略全体であつたらしい。

『偉人リンコルン』を紹介した田邊丈夫君の話振は努めて莊重を旨とした跡は誰にも首肯せらるゝところであつた然し何事でも時代がついて骨董品になるまでには長年月を要するものである帽子の徽章に墨を塗つて三年生を氣取つても何うも工合が悪く様々なもので伯大隈式の口調も結局擧に倣ふの譏を免れなかつた今や聽衆の倦怠は漸くその度を加へ來つて隨分酷惡な彌次を極めた乃で辯士も甚だ陣形を亂して原稿を唯一の楯として拒ぐより術が無くなつた。一部分の同情者は盛に憤慨し起て場内の統一の責を委員に詰めかけたので新任早々の委員の板狭みの窮狀は實に見るに忍びなかつた。

一体近來流行の虞れある何とも解からぬ彌次を「モツブ」的にやる傾向が有りはしまいか否此場合には意味が無いでも無いが甚だ廣言を憚る様な事情らしい何故説を聽くに誠意を以てし聽いて然る後にその

優劣を冷靜に公平に評價せぬのであるが成程彌次り飛ばすのも辯士を鍛鍊するには多少の効果は有らう而もさる好意の寸毫此間に存する事は何人にも全然認めらるゝ事が出來ないのは如何斯様な無作法な卑劣な態度を他人に見透かされて尙恬然たるを得るか委員津田君の云つた「五高生たるの体面人格に訴へて」その一言は確かに感覺ある人の頂門の一針に値すべき筈だのに。

此の度の演説會を通じて不快に感じた事があるが一端を仄かして有識者の高評を待つ事にする。

扱て最後の永松陽一君(一部三年)の演説には既に他部生間にも定評があつた一部生の名譽の爲めに大いに踏止まつて戦ひ「日本ニプリムローズを偲ぶ」てふ題の下に何時とはなく彌次の大軍を喰止めた手腕は適老將の器量と謂はざるを得ない歐州政界の檜舞臺に顯はれた千兩役者「デスレリー」を自由自在に髣髴せしめ度々日本外交の不振を歎したので彼デスレリーにも劣らぬ意氣満々健兒連は思はず乗り出した、壇上に立ての身振には聊か申分があるかも知れぬそれから君の透徹せる音調を殊更に抑へたのは努

方の跡と見るべきであらうが折角の聲を持ち乍らと一寸感じた。

津田元一君起て閉會を宣す次で發表された演説の成績は實に次の如し(但し調査は列席新聞記者及五高教授數名の投票による)

第一等 東 喜代松君(二部)

第二等 永松 陽一君(一部)

第三等 淺倉銀四郎君(二部)

夫々賞品の授與があつて十一時と云ふに散會した。獨り一部と云はず二部と云はず隠れたる雄辯家の不尠のに大いに意を強うし將來此等の人達が政壇に立て虹霓を吐く」の壯觀はなど妄想を逞うしつゝ飯つた。

(別評)奇怪至極な驚くべき演説會だ五高の名のために譽のためにあつてはならぬ演説會だ取消が出来れば取消したい演説會だ。辯士何の顔あつてかわが五高の辯舌を代表するかくの如き辯士を出さねばならぬ程五高の雄辯とはつまらぬものか。この日の演説會は永久に五高の恥辱だ。辯士必しも悪いのでは無

い。萬歳なのは五高のモツブだ。輕佻なる彌次だ。惡辯を葬れ。モツブを葬れ。(△)

新入生歡迎演説會

秋風起て白雲飛ぶ銀杏城下に、三百の新校友を迎へたる吾人は、新しい意氣と理想とに振ひ起されて大正二年十月二日、瑞邦館に歡迎演説會を開いた、電燈の光薄き瑞邦館には、午後六時頃より聽衆續々と來り近來稀なる盛會であつた、永松委員の開會の辭に次で宇佐見部長は歡迎の辭を述べ且つ演説に對する努力を警告せられ、それより左の演題に就て各自得意の雄辯を揮ひ、歡聲拍手時々龍山下の夜の空氣を震はせたのである、今紙數の都合により其の演題のみを掲ぐれば

辯論に就て 一部一年甲 糸永小一郎君

靈活なる人生の理想

一部一年乙 前田 一君

Prince Bismark を思ふ

一部二年甲 津田 元一君

大國民の覺悟

一部三年甲 永松 陽一君

今までは「爲よ」と教へられた

一部三年甲 古野 周藏君

橄欖の一片 一部三年乙 長船 義熊君

秋夜沈々と更けて辯士の血は益々燃わたのである、
時間切迫の爲め部長宇佐美教授の講評を止めて長船
委員が閉會を宣した時は夜十一時であつた。

文學博士井上哲次郎 先生講演

我が國哲學界の authority 文學博士井上哲次郎先生
肥州熊本にその英姿を現はさる先生に時間充分なら
ざりし爲め十月八日正午より午後一時迄僅に一時間
の講演を聞き充分先生を味ふを得ざりしを恨むと共に
其聲咳に接するを得たるを喜び茲にその御厚意を
感謝し併てその講演の大要を記すれば「人生と修養」
なる題下

自分が最初長崎に次に東京開成學校に笈を負うた
頃よりの友人の成行を回顧する時は如何に優秀な
る才學ありし人も品性に多少の缺點ありし者は今
は悲惨なる運命にあるを見る。殊に衛生の點に關

し當時より注意せしものは其の初め體格虛弱にし
て成業を疑はれしものも長壽を保ち社會各方面に
花々しき治動を示すも不攝生なりしものは當時強
健と羨望せられし者も故人と成り果てたるものが
多い。實に衛生は廣義の道德にして又修養である。
かの貝原益軒先生が生來虛弱の身を持ちながら能
く八十五才の高齡を保ち老いて益々盛なりしは衛
生その宜を得たるに起因し實に衛生と修養とは同
一物であらねばならぬ。又人には進取的の人と退
守的の人とある。變化多き我が國には進取的の人
を要し實に明治文明に偉大なる貢獻を爲したるも
此の性質の人にて此の進取的の人は假令失敗あり
とするもそれは後日の教訓となるものにして之に反
して退守的の人は過失は少きも修得したる事を充
分應用貢獻することなく世を去るが故に文明に盡
瘁する所は少い。故に諸君は何事をか爲さんどす
る旺盛なる精神により日本の文運に貢獻すべきで
ある。一体學生の氣風を變遷せしむる社會其他種
々の強烈な刺激の中には有益なるものと共に有毒
なるもの混在すれば高等學校生徒諸君は鋭敏なる

批評眼を具へて美点は摘んで殘さず缺點は却けて近寄るべからず。又彼の茅屋松下村塾に伊藤山縣木戸を初として維新の大英雄を輩出せしは嚴格なる教育の賜にして乃木大將は修養に依て彼の崇高なる人格を作りあげ若し又伊藤公にして彼の品行なかりせば周公旦以上なるべしと言つた人もある東西の聖人孔子と Socrates とは共に古今の大偉人なれども實は吾人と全じ人である。或觀相學者が Socrates を見て「彼は情欲深き人なり」といつた時彼は「然り。吾は情欲深し。されど余は是を制す」と答へた。賢愚の分るゝ所茲にあつて其の間髪を容れない。道徳には永久不變のものあり智識には消長がある。現今の學生は智識は兩聖人に勝ることあるも其の道徳的人格の点に於ては千里を距つ然しながら修養に依て孔子や Socrates の域迄に達し得ることは明である。吾人は歩一步修養を積んでその域に達することに努力せねばならん。

演說部第二學期例會

大正三年の新生氣は正に龍南に漲り、南枝の梅花先づ綻びぬ、去年は憲政擁護大會に我が國民の氣四海を壓したるが今年は南海櫻島は黒烟天に沖し地球の大火焰は天地を震駭せしめぬ。我が龍南演說部は此の時此の際大正三年早々龍南健兒の赤誠燃ゆる大氣焰を吐かんと一月廿一日午後三時より瑞邦館に於て例會を開きぬ。唯我部が龍南演說部の大立物たる長船委員を失ひ轉た荒涼の感あるを悲み小生復不肖にして一人能く壹千の健兒諸君の希望に添ふ能はざらんことを恐る。開會の辭に次で。

時勢と青年

一、二、甲二、津田 元一君

先づ吾人は時代を知るべし時代を知る者が英雄なりと論じ更に語を轉じ和歌を引いて我國民は古來悲哀を訴ふるに馴れたるが英國青年は常に雄大なる精神に溢るとて兩者を比較し世界の大勢は時々刻々進歩し生活は日々壓迫せらる此の時我が國古來の道徳習慣何かせん吾人は唯時代に注目し消極的満足に陥ることなく常に新しい生氣を以て活動すべしと結ぶ。

櫻嶋を見て

一、三、甲二、永松 陽一君

出發の動機は唯一片の幼稚なる噴火見物であつたが歸る時は全く變じて櫻嶋嶋民同情の念に深く刻まれたるを告白し順序として鹿児島市被害の慘狀を陳べ次に實地櫻嶋に渡つて櫻嶋の村落は赤熱せる熔岩の下に埋もれ燃ゆるものは燃ゆるものは熔け牛馬の死屍は累々として海岸に横はり幸に生を保つ牛馬あれば獨り無人の積灰の上を徘徊して人を慕うて哀にも自分等の傍へ近づく哀情を訴へ最後に避難民は四離滅裂親は子の生死を知らず妻は夫の安危を憂へ或は父の死骸を目前に横へて涙き叫ぶ狀を叙し幸なる吾人は唯精神的に同情するのみならず物質的にも贅澤を避けて一錢たりとも彼等不幸なる島民に義捐すべしと結ぶ

帝大の特權問題 一、三、甲一、古野 周藏君

冒題に高等文官試験は天下の俊才を採擇する目的ならば此の試験は決して俊才を登用する道にあらざるを論じ轉じて帝國大學と私立大學との關係を藥學専門學校と藥學専門學校普通部との關係に比較し一段聲を勵まして文部省が工學士が技師になり醫學士が

醫師を開業するに試験を施さば誰も政府の愚を笑ふべきに法學士は政府自ら是を教育しながら自分の施した教育に成れるものを自ら疑うて試験するは自家撞着なり然らば文部省は何故無試験にても適當と認むる學士を作る教育をせざるかと駁しぬ。

Anything prof.

Waller.

先生は此の題下に一大雄辯を吾人に聞かせ下さる筈なりしも御不快の爲め止められ吾人其の聲咳に接する能はざりしは残念なり

講評

部長 宇佐美 教授

其の講評に於て皆元氣旺盛せるを稱せられ同時に聲量を節して使ふべく注意を與へられぬ寄宿舎は閉鎖中、學校は追試験中なれば聽衆如何と危みしが聽衆も多く辯論にも活氣ありて非常なる盛會なりしを喜ぶ。(Y.N.生記す)

(記者より)

委員の更迭、雜誌部の都合等にて部報の後れたる罪を謝す

水泳部報

ちやんばー

見すや浩渺たる海原の雲根を浸せるを。風ては慈母の心たり。荒ては狂亂の暴君たり。來りて偉大なる自然力に接せよ。寛容なる海の懷に入れ。

玄海の怒濤と戦へる虹の松原よ白砂青松にして延長二里。松、真砂、海の三色は穹形に曲りて真に虹の觀あり。朝露を踏みて岸頭に立て。汀に碎くる小々波は朝霧の間より搖き來りて絶えず波紋を畫けり。

天地未だ覺めずして聲なくたゞ波ののたり／＼と動搖するあるのみ。氣は冷かにして皮膚緊張し境は清淨にして胸擴がり身延ぶ苟くも浩然の氣を養はんに又之に勝る地あらんや。酷暑の季は來れり。我龍南の世界も今や閉塞せられんとす。我部は實に此期に當りて活動する者なり。龍南の健兒よ。炎暑に恐るゝ勿れ。休暇を浪費する勿れ。紅塵萬丈の都會に齷齪とせんより來りて玄海の空氣を吸へ。病める者よ唐津に遊べ。玄海の波浪は汝の胸を固めん。煩悶せる者よ唐津に來れ優麗なる景色は汝の憂苦を打破せ

ん。八百の同窓よ來りて汝の腕を鍛へ。筋骨輕快、進取の氣象を得る事自ら驚く者あるべし。

唐津は古來韓唐との交易の衝に當り舊蹟亦少からず、史上に輝く鏡山は虹の松原の南側松浦川の清流に沿ひて聳け佐用姫の芳ばしき歴史も各所に跡を殘せり。神功皇后が釣を垂れ給ひし玉島川は虹の松原の東端に流れ。英傑秀吉が大陸の平定を夢みつゝ大軍を指揮せし名古屋城趾は今尙は當時を語れり。近邦尙名所夥し。七つ釜立神岩烏帽子燈臺等特に壯觀なる者なり。我水泳部は此天地に活動せんとす。諸君來りて腕を練れ。遊びて歴史を探れ。名所を寫せ。而して真に水泳部を味へ。

合宿所 佐賀縣東松浦郡唐津町虹松原 熊澤旅館内

來會者は各自毛布持參を乞ふ。

期日合宿食費等後日報告す。

○弓術部報

二月十五日(百射會)

鍛ひに鍛ひし三週間の腕をためすは此時なりと集り七手垂十二人皆我こそはと自信の色明かに松吹く

風も音をしづめ今日の勝負を待てり。

先づ一番に金的は永松君の手に落つ、次で尺二的の百射會を爲す、左に成績を示さん

- | | | | |
|------|-----|------|-----|
| 七十七本 | 谷川君 | 六十七本 | 永松君 |
| 五十四本 | 大山君 | 五十四本 | 町野君 |
| 四十五本 | 佐伯君 | 四十一本 | 鶴君 |
| 三十八本 | 糸永君 | 三十五本 | 許斐君 |
| 二十八本 | 天春君 | 二十二本 | 三戸君 |
| 二十本 | 中村君 | 十六本 | 石橋君 |

三月八日 (射納式)

當日の成績如左

- | | | | |
|-----|-------|----|-----|
| 金的 | 町野君 | | |
| 尺二的 | 束 町野君 | | |
| 一等 | 谷川君 | 二等 | 永松君 |
| 三等 | 佐伯君 | 四等 | 大山君 |
| 五等 | 町野君 | 六等 | 和田君 |
| 七等 | 狩野君 | 八等 | 石橋君 |
- 右終りて例に依り源平試合を爲し中央に尺二的をかけ左右に六寸的をかけ尺二的に中りしものを得點とし六寸的を減點とし各人六射とせり

源(勝)

平

- | | |
|-----------|----------|
| ○○○、○○谷川 | ○、○、○、永松 |
| ○、○○●○大山 | ○、○、○、佐伯 |
| 、○○、○●町野 | 、、、、、和田 |
| 、○、○、○、石橋 | 、、、、、狩野 |

(○得點●減、點無點)

例に依り敗軍は弓場を匍ふ規定なるも敵將終に規定を破りて匍はず

右終りて兩軍互に龍田饅頭に舌鼓をうち充分歡をつくして別る。

進級者如左

- | | | | | |
|-----|-------|----|----|-------|
| 進三級 | 永松 | 陽 | 町野 | 一 |
| 進四級 | 和田勤一郎 | 三戸 | 豊吉 | 狩野 一郎 |
| 進五級 | 糸永小一郎 | 中村 | 金藏 | |